CONTENTS

SHUTOKO Vol.24 Spring 2016

2 コラム RAMPWAY
泉 麻人

特集 ダイバーシティ

5 あるべき社員像が変わる
中央大学大学院 経営戦略研究科 教授
佐藤博樹

9 ピンチなのか、チャンスなのか
内閣府 少子化危機突破タスクフォース 政策推進チーム リーダー
渥美由喜

13 データ物語
もうすぐ10年！
見沼たんぼ首都高ビオトープの育成状況

14 Taste of the Season
森下典子

16 首都高HEADLINE

18 business essay
継続する中小企業のダイバーシティ
福山大学 経済学部 教授
中沢孝夫

20 つくる人まもる人
首都高速道路株式会社 寺末奈央
首都高速道路株式会社 髙橋麻依子
首都高メンテナンス東東京株式会社 芦澤千明

22 高速百景 中野正貴

cover photo by Minoru Saito
contents produced by
Metropolitan Expressway Company Limited

column | RAMPWAY 24

首都高名所案内

高島平と赤塚の山の大仏

コラムニスト
泉　麻人

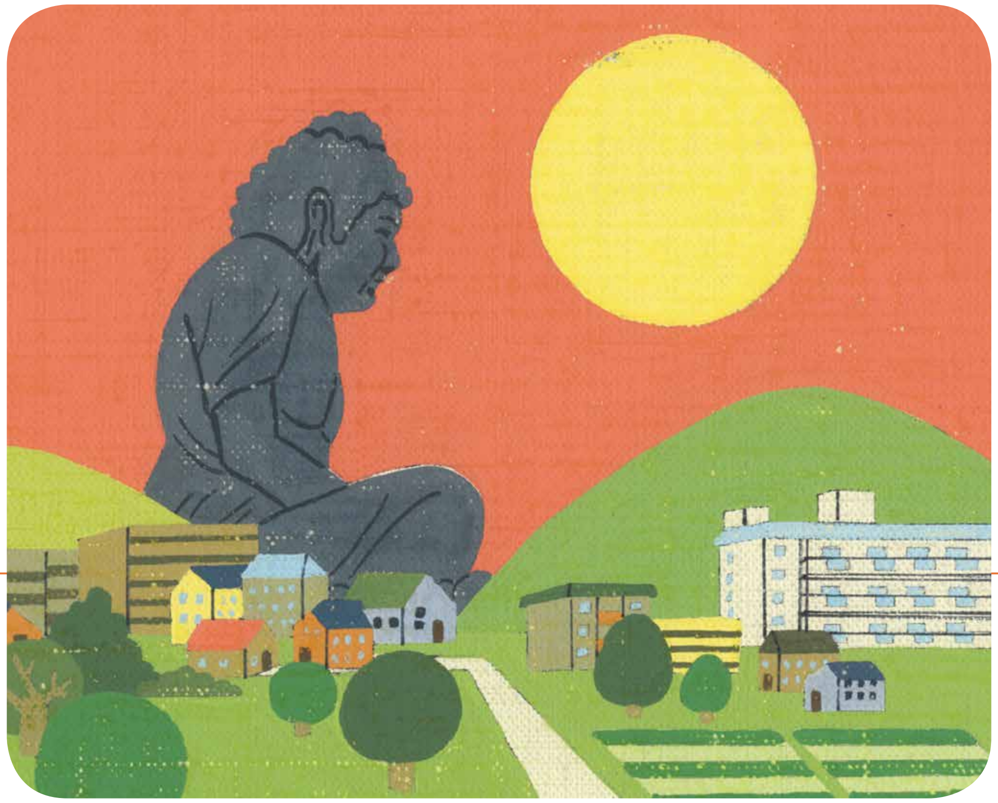

illustration by Takao Nakagawa

首都高の5号線を都心から埼玉の方へ走っていくと、板橋の中台のあたりから左手に小高い丘陵地が見えてくる。近頃はかなり宅地が増えてきたけれど、まだ所々に緑の木立が残っていて、ふと郊外の方に出てきたようなくつろいだ気分になる。

そんな台地の手前に広がっているのが高島平団地のマンション群。誕生したのは1970年代の初頭だが、それ以前は俗に〝徳丸たんぼ〟と呼ばれる23区内随一の穀倉地帯だった。青々と稲が実った時代に行ったことはないけれど、一帯が埋められて広大なサラ地が続く開発直前の景色は目の奥に焼きついている。団地の建設に先行して敷設された、都営地下鉄の開通初日に乗りに行ったのである。手元のストックブックに収められた記念乗車券に、(昭和)43・12・27の年月日が入っているから小学6年生の冬休みだ。僕は鉄道自体よりも、当時記念乗車券集めに熱中しはじめていた頃だから、キップ欲しさに繰り出したのだと思われる。開通当時の終点・高島平はまだ志村の名で、高架のホームに降りたったとき、ナーンもないサラ地の向こうに赤塚から西台の方に続く丘陵が見えた。

へー、23区内にこんな場所がまだあるのだ……あのときの〝さいはて感〟は50年近く経っても忘れられない。

首都高を高島平で降りて、そんな赤塚側の丘の方へ行ってみる。赤塚公園の裏手には、松月院、乗蓮寺、浅間神社……いくつかの寺社が集まっている。板橋北方の丘陵にはかつていくつもの城が置かれたが、この一帯は15世紀後半から16世紀にかけての戦国時代、赤塚城が築城されていた所だという。

城に変わって、いまこのあたりのシンボルになっているのが乗蓮寺の境内に建立されている東京大仏。1977年に誕生した、歴史的には割と新しい大仏像だが、黒光りしたガンメタっぽい質感はなかなかインパクトがある。また周囲には、行者の「役の小角(おづの)」をはじめとして、ちょっとマニアックな人物の石像が配置されている。

乗蓮寺と一つ谷を挟んだ南方の松月院は、古い山寺の風情が感じられる。徳川家康の時代に幕府の御朱印寺に指定され、そしてこの寺は高島秋帆とのゆかりも深い。秋帆は江戸時代に西洋砲術を広めた人物。天保12年(1841年)、荒川(新河岸川)端の徳丸が原で西洋砲術の大演習が催された折、松月院の本堂が本陣に使われた。そう、高島平の地名はこの高島秋帆にちなんだものなのだ。

松月院通りと名づけられた門前の通りを東方へ行くと、紅梅小学校の近くに「槇」という古民家調のそば屋がある。店も古いが、その並びに江戸時代中期建築という茅吹き屋根の農家が保存されている。粕谷さんという昔の名主のお宅らしいが、日時によって見学もできる。この辺、まわりにも田舎じみた建物が点在していて、のんびりとした散歩を愉しむことができる。

いずみ あさと／1956年、東京都新宿区生まれ。慶應義塾大学商学部卒業。79年、東京ニュース通信社に入社。『週刊TVガイド』などの編集者を経て、フリーのコラムニスト。近著に『大東京23区散歩』(講談社)がある。